

創立 20 周年を迎えて

情報通信技術委員会 理事長
羽鳥 光俊

情報通信技術委員会（以下 TTC とする）は、2005年10月25日に、創立20周年を迎えます。ここに TTC 創立に一致団結してあたられ、今日の TTC の基礎を創られた関係者の方々、及びその後数々の標準化に貢献していただいた技術者の皆さまに改めて感謝の意を表したいと思っております。

20年に亘る情報通信技術の標準化活動は世界に自慢できることだと感じており、理事長としても非常にうれしく思います。

ここでは、今までの標準化に関する活動について常日頃感じていることを、少し述べたいと思っております。

TTC の設立の経緯については、多くの方が述べられているので詳細はそちらにゆずりますが、電気通信事業における日本電信電話公社や国際電信電話株式会社等による100有余年にわたる独占状態に終止符をうち、自由競争の導入による電気通信事業のさらなる発展をめざして、1985年4月に電気通信事業法が制定されたことがTTCの発足につながります。

電気通信事業法の制定にともない新規参入事業者(ニューコモンキャリア)が現れ、それぞれが独自の技術でネットワークを構築すれば、通信の本質である相互接続性が損なわれることに他なりません。かと言って政府による技術標準の作成に頼って自由な競争が損なわれることになりかねない。そこで、政府が決める技術標準(強制標準)は、ネットワークの損傷防止等を図るものに限られ、その他は民間の手にゆだね、公正かつ透明な手続きのもとで標準化活動を行うことになったものと理解しています。

さて、舟木初代事務局長の言葉を借りれば、「会員の会員による会員のための」標準化活動、すなわち、参加したい者は、入会金と年会費を払え

ば、原則として誰でも、参加することが出来る事を指向した組織であったと思っております。

いずれにしても当時、今日ほど情報通信技術が発展すると思っただ方は少なかったことと思っております。

標準化の抱えるひとつの課題として、知的財産権(IPR)あるいは、特許の問題があります。1990年代前半にはいわゆる潜水艦特許の出現など、特許制度を揺るがす出来事がありました。アメリカの特許制度は先願ではなく先発明主義であり、また、出願中の特許案件を公開する必要がない上に、特許の有効は申請時からではなく成立時から17年間有効とされるもので、国際的にも問題となりました。

1990年代後半のビジネスモデル特許登場時の、不安と期待も記憶に新しいところです。これは、インターネットなどのITの普及にともない、アイデアが事業に直結する可能性がもたらされたことから生じたものです。製造メーカーばかりでなく、それを利用する通信事業者や放送事業者にも特許料の支払いが求められるような戦略の変化は、広く社会的に話題となりました。知的財産権と標準化とは密接な関係があり、今後とも注意深く対応していく必要があると考えています。

また、ネットワークインタフェース(NII)など国内外の網接続に直接関係する標準化部分は別にして、アクセス系などは、標準はひとつに限定しないで複数設けることも間違いではないと感じています。実際問題として、携帯電話の3GPPsやADSLでは複数の標準化が現実化しています。各事業者が自己の責任と負担で進めるならば、その技術の進歩を妨げないように、従来の発想をかえるような柔軟性も持つべきであると最近では考えています。

一方では、ISDNのアクセス方式に、ピンポン伝送方式(TCM)とエコーキャンセラ方式(EC)の2方式があったことが、ISDNの普及を妨げたかも知れません。また、パケットとFR、ATMの選択は一つの方が良かったかも知れません。標準化にあたっては細部を詰めることと、大きな流れを議論することが重要かと考えています。汗と涙で一方式にまとめようとした技術者が、大勢いたことも忘れてはなりません。

この20年間にあった、エポックメイキングな事としては、たくさんあると思いますが、やはり近年の携帯電話事業の急速な伸びにより、その加入者が固定電話のそれを越えたこと、インターネットの普及により電話(64Kbit)の世界から、数10Mbitあたりまえのブロードバンドの世界になったことがあげられます。また相対的に固定網の衰退(収入的にみて)が始まりました。AT&Tの吸収合併は象徴的な事件であり、これは世界的な潮流とも言えます。情報通信技術の発達は、生活様式に様々な変化をももたらしていますが、通信がギャランティ型からベストエフォート型に変わろうとしています。しかし、無停電保守などの現行のアナログ電話の良さも残したいものです。

一方、標準化のプロセスも大いに変化してきています。従来のように時間をかけて世界各国のコンセンサスを得てきたITUのやり方ではなく、フォーラムによる、スピードを重視したデファクトスタンダード的な手法が台頭してきています。それはそれなりに、大きな役割を果たしてきたとは思いますが、統制ができなくなってきたというデメリットも最近目立ってきました。

設立から20年間の間にTTCも様々な変化をとげたと思います。インターネット等IT技術の普及にともない、電子会議・投票の導入や、ペーパーレスによる会議運営を行うとともに、翻訳等をしないで英文そのままによる仕様書を作成するなど、時代に合わせて組織の構造や標準の決定プロセスの迅速化を図りました。アメリカのT1委員会が改組によりATISに吸収されたように、各国でも標準化のプロセス、組織の見直し等が行われています。TTCも時代の変化に合わせて、役割、組織そして戦略を変えていく必要があると思います。

この20年間に標準化にご活躍頂いた方々をあげればきりがありませんが、TTCでは昨年、情報通信技術賞総務大臣表彰を設け、ご苦労頂いた方々に少しでも報いる制度を設けたところです。昨年の受賞者である青山先生、浅谷先生、池田先生、今年の受賞者の北見先生の標準化活動におけるご功績は誰もが納得することと思います。改めて感謝とお祝いを述べたいと思います。

最後に今後の課題を列挙して、今後の標準化活動の方向性を示し筆をおくこととします。

- (1) 競争と協調の精神の再確認
自社の利益、日本の国益の主張と全体の利益のバランス
- (2) 国内標準の作成に加え、国際標準化のためのアップストリーム活動の重視
TTCの標準化とITUでの標準化の位置付けの明確化
- (3) 標準化活動に貢献したことに対する、社内、社外における、適正な評価
- (4) 国内外の標準化のプロをサポートする組織づくり

などが検討すべき重要事項と考えています。

熟成したワインが醸し出すような上品な文章で、会員の皆さまに感謝し、ここちよい気分浸ってもらいたいと思いましたが、なかなか至難の業であることを悟りました。その役目は、やはり最良のワインにゆずることとしたいと存じます。

小生は、お酒に弱いので、美味しいお酒を少々=ワインということになり、時折、至福の時間を楽しんでおります。最近のボルドーのものでは、2000年が素晴らしく、2003年は前代未聞になるかも知れないと期待されています。

来年春に売り出される2003年のグランヴァン(Ch. オーブリオン、Ch. マルゴー、Ch. ラフィットロシールド、Ch. ムートンロシールド、Ch. ラトゥール)がすばらしいのではないかと期待しています。

話が少しそれましたが、今後ともTTCが会員の皆さまの(企業)活動に、寄与する存在であり続けることをお約束するとともに、新たなる前進に向け会員の皆さまのさらなるご支援をお願いし、20周年記念特集号の巻頭挨拶とさせていただきます。